

2017年10月15日(日)

説教:「人の中には霊があり」

聖書:ヨブ記32:1~14

伊波普猷は、当初「廃藩置県」を、近代・国民国家の訪れとして是とした。欧米諸国は、近代国家を築いて経済的にも、軍事的にも大きくなって行く。伊波はこの近代国家の豊かさの必要を琉球の貧しさゆえに語る。沖縄はこれまでの琉球王国という旧体制が破壊されたが、琉球民族は日本帝国という新制度の中に入って「復活したのだ」と言う。しかし、廃藩置県が敷かれて45年が経過するが、いまだ沖縄人(ウチナーンチュ)の置かれた状況は苦しい。那覇の言葉で「チムンテーアラン(思うようにならない)」と多くの者が言う。日本帝国の中に置かれても沖縄の苦しみは変わらない。いや、琉球王国時代の薩摩支配の時よりも、なお沖縄人の苦しみは大きい。

伊波は、歴史を学ぶことの大切さ、自分の置かれた立ち位置、自分の置かれた歴史を見ることの大切さを教える。そして、近代国家の誤りを指摘する。日本国がそうであるように近代国家は異質を排除する。そして同化を強制する。

ヨブ記に「人の中には霊があり」とある。この「霊」とはヘブライ語の「ルアハ」。この「ルアハ」は創世記の「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」(2:7)とあるこの「息」が神の霊、聖霊ということ。そうすると「人の中には霊があり」とは、人の中に「神の霊があり」と言っている。

「人の中には霊があり」とは何か？ 霊は、国家の中にあるとは言っていない。霊は人の中にあるという。それは、人一人に神の霊は宿り人はある。人は、神の息が吹き込まれて、神の霊が人の中にあって「人は生きる者となった」。ゆえに人の命の尊厳は大事にされなければならない。人一人の個性は大事にされなければならない。人間の歴史を見ると、人間というものは如何に罪深い者であるかが分かる。来週は、この国のあり方を問う大切な選挙。歴史を重んずる方が選ばれることを願ってやまない。(神谷)